

# 新宿のニューカマー韓国人の ライフヒストリー記録集 1

---

## 신주쿠에 새롭게 이주해 오신 한국인들의 라이프 히스토리 기록집 1

新宿の韓国人100人の話プロジェクト



2010年5月10日

## 目次

プロジェクトの概要／프로젝트 개요 .....	3
インタビュー調査について／인터뷰 조사에 대하여 .....	5
インタビュー要約の一覧／인터뷰 요약의 일람 .....	9
キム・スヒョン(20代・女性)「日韓共同作業を夢見る、作家志望生」	10
Yさん(30代、男性)「新宿は今の自分にちょうどいい」	13
PHさん(30代・女性)「幼稚園は小学校の予備教育？」	17
PYさん(20代・女性)「10月に戻ります」	20
PHさん(20代・女性)「将来の夢はパン屋さん」	24
L・Mさん(20代・女性)「5年間の日本の留学生生活を振り返って」	27
Tさん(40代、男性)「新宿から二度目の出発」	31
Tさん(30代・女性)「異国での出産と教育について」	33
Annさん(40代・女性)	
「日本語さえできればたくさんの機会がある国、日本」	36
<プロジェクトのキーワード> ナラティブ理論	
<프로젝트의 키워드> 내러티브 이론.....	39
スケジュール／스케줄 .....	43
プロジェクトメンバー／프로젝트 멤버.....	44

## ごあいさつ

### 新宿にいる韓国人の話を聞いてみませんか？

「興味はあるけど、知り合いもないし、いきなり聞けないよ…」

そんなあなたのために、インタビュー経験豊富なメンバーがプロジェクトチームを立ち上げ、9人のふつうの韓国人の話を聞いてきました。

この冊子には、そのインタビューの要約が掲載されています。きっと、いろいろな話が聞けることでしょう。また、コラムとして、このプロジェクトの理論的背景の解説やインタビューの体験談も盛り込みました。さらに、インタビューの雰囲気やことばのニュアンスまで知りたいという方のために、プロジェクトのホームページ上により詳しい内容も掲載されています。興味のある方はぜひアクセスしてみてください。

今後も全部で100人になるまで定期的に発行していきます。お楽しみに！

2010年5月10日

研究代表 渡辺幸倫

このプロジェクトは、トヨタ財団2009年度研究助成（D09-R-0422）『新宿のニューカマー韓国人のライフストーリー記録集の作成—顔の見える地域作りのための基礎作業—』（2009年11月～2011年10月）の助成を受けています。

(<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx>)

## 인사말

### 신주쿠에 사시는 한국인의 이야기를 들어 보시지 않겠습니까?

“관심은 있지만, 아는 사람도 없고, 갑작스레 묻기 힘들어요...”

그런 분들을 위해 풍부한 인터뷰 경험을 가진 멤버가 프로젝트 팀을 결성해 9 명의 평범한 한국인의 이야기를 들어보았습니다

이 책자에는 인터뷰의 요약이 게재되어 있습니다. 틀림없이 다양한 이야기를 들을 수 있을 것입니다. 또한 칼럼으로서 이 프로젝트의 이론적 배경의 해설과 인터뷰 체험담도 실려 있습니다. 게다가 인터뷰의 분위기나 단어의 뉘앙스까지 알고 싶으신 분들을 위해 프로젝트 홈페이지에 인터뷰 전문도 게재했습니다. 관심이 있으신 분들은 접속해 보시길 바랍니다.

앞으로 총 100 명이 될때까지 정기적으로 발행할 예정입니다. 많은 관심 부탁드립니다.

2010년 4월 30일

연구대표 와타나베 유키노리

이 연구는 도요타재단으로부터 연구조성프로그램의 조성금(조성번호 D09-R-0422) 『신주쿠에 새롭게 이주해 오신 한국인들의 라이프 히스토리 기록집 작성—얼굴이 보이는 지역사회만들기 기초작업—』을 받아 이루어지고 있습니다. (기간 : 2009년 11월부터 2011년 10월)

(<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx>)

## プロジェクトの概要

多文化・多民族化する日本の地域社会で、住民同士のつながりをどのように作っていくのが重要な課題となっています。特に新宿区では韓国人ニューカマーが大きな存在感を持っているものの、地域の人々との接点は必ずしも多くなく、「顔の見える関係」という地域作りの基盤が弱いといわれています。

本プロジェクトでは 100 人の韓国人ニューカマーに一人一時間程度のライフストーリー・インタビューを行い、その内容を本人の同意のもと、定期的に印刷物・ホームページで公開し自由に共有できるようにします。重要な社会の構成員としてインタビューされる人々の地域社会への所属意識向上が期待できるとともに、受け入れ社会側には「地域にいる『韓国人』も、かけがえのない人生の一時期を、同じ地域空間を共有しながら生きている」という気づきが可能となるのではないのでしょうか。

このプロジェクトの理論的背景には、人生を語り／聞くことで世界観を作っていくという物語（ナラティブ）理論があります。本プロジェクトは、インタビューを通して、関係する全ての人が自己を肯定しながら社会を理解できるようになることを目指しています。このような人と地域のつながりを作る手がかりを得ることが本プロジェクトの目標です。

## 프로젝트 개요

다문화, 다민족화가 진행되고 있는 일본 지역사회는 주민들 사이의 연결고리를 어떻게 만들어 가느냐라는 중요한 과제를 안고 있습니다. 특히 신주쿠는 한국인 이주자가 큰 존재감을 가지고 있지만 지역의 주민들과의 교류가 적어 “얼굴이 보이는 관계” 라는 지역사회를 만들기위한 기반이 취약합니다.

본 프로젝트에서는 한국인 이주자 100 명에게 한 시간 정도의 라이프 히스토리 인터뷰를 하여 본인의 동의하에 그 내용을 정기적으로 인쇄물, 홈페이지에 공개하여 자유롭게 공유할 수 있도록 하려고 합니다. 이로 인해 인터뷰에 응해 주신 분들이 사회의 중요한 구성원으로서 지역사회에의 소속감을 고취시키는 것과 동시에 지역사회 측에는 “지역사회에 속한 한국인 또한 인생의 소중한 한 시기를 같은 지역공간에서 함께 살아가고 있다” 는 사실을 깨닫게 할 수 있지 않을까요?

이번 프로젝트는 인생에 대하여 듣고 말하는 것을 통해 세계관을 만들어 나가는 이야기(내러티브)이론을 배경으로 하고 있습니다. 그리고 인터뷰를 통해 모든 분들이 자신에 대해 긍정적인 마인드를 가짐과 동시에 사회를 이해할 수 있기를 바랍니다. 즉 사람과 지역의 연결고리를 만드는 계기가 되는 것, 그것이 본 프로젝트의 목표이기도 합니다.

## インタビュー調査について

武田里子

このプロジェクトは、調査チーム 10 人でニューカマー韓国人 100 人のライフストーリーを集め、それらを文字化して公開することにより、日本人と韓国人の双方で共有できるようにすることを目指しています。インタビューは、①日本に来日した経緯、②現在何をしていて、③どのような将来構想をもっているのかを中心に、家族関係や日本人との関係、日本社会についての意見などを織り込んで自由に語っていただく手法をとっています。まだ、インタビュー内容をどのように要約するかなど、メンバー間で試行錯誤をしている最中ですが、今回は初めての報告なので、実際にどのようにインタビューを進めているのかについて、私の経験と感想を中心にご紹介します。

これまでに私がインタビューしたのは、日本語学校生 3 名と韓国系企業で働く 3 名です。性別は女性 4 名と男性 2 名、年齢は 21 歳から 33 歳、来日時期は 1998 年の方 1 名を除くと 2002 年以降です。6 人に共通しているのは、いずれも日本での生活の第一歩を日本語学校生として歩みだしていることです。日本で学ぶ韓国人留学生は 1 万 9605 人と国籍では中国に次いで 2 番目に多く、留学生 13 万 2720 人（2009 年）の 15%を占めます。韓国人の若い世代は、日本語学校を経て大学や専門学校に進学、あるいは就職するというライフコースを歩んでいる方が多いのではないかと思います。

最初の日本語学校生は知人に紹介してもらい、次の方は、その方から友だちを紹介してもらおうという、スノーボール方式で進めています。初めは面識のない方に上手く会えるかどうか、インタビューがちゃんとできるだろうかと不安でしたが、これまでのところ問題なく進んでいます。インタビューを始める前に、プロジェクトについてパンフレットにそって説明をします。インタビューを IC レコーダーで記録させていただくこと、文字起こしした内容

を再度確認していただくこと、そしてその内容をホームページや紙媒体で公開することを明記した同意書にサインをいただいた後でインタビューを始めます。

インタビュー内容は報告書の頁をお読みいただくこととして、ここでは私自身がこのインタビューを通じて印象に残ったことを記します。それは、彼らの家族観や社会観、人生観と私が限られたメディアや文献情報から形成してきた「韓国観」とのギャップでした。ひよっとすると、お話を伺った方々は、日本（海外）で学び働くという意味では、特別な韓国人かもしれません。それでも韓国社会の変化のスピードの速さをうかがい知ることができます。わずか6人の物語に過ぎませんが、韓国と日本という2つの国を往来しながら、自分らしく生きたいという思いと結婚や家族規範との間で悩み、夢を追い求めて挫折し、そこから再び立ち上がってくる彼らの物語は、当たり前とさえ言えば当たり前ですが、人が生きていくこととは、日々新しい物語を紡ぎだしていくことだということに気づかされます。これから紹介していくニューカマー100人の物語の中に、これをお読みいただく皆さんにも新たな発見や共感する言葉との出会いがあり、それらがニューカマー韓国人との新たな「顔の見える」関係づくりの一助になることを願っています。



## 인터뷰 조사에 대하여

武田里子

이번 프로젝트는 10 명의 조사팀이 새로이 이주해 오신 한국인 100 명의 라이프히스토리를 모아, 문자화하여 보고서와 홈페이지에 공개함으로써 한국인과 일본인이 상호간에 공유할 수 있도록 하는 것을 목표로 하고 있습니다. 인터뷰는 1)일본에 오게 된 경위, 2)현재 무엇을 하고 있는지, 3)미래에 대해 어떠한 계획을 가지고 있는지를 중심으로 가족 관계, 일본인과의 관계, 일본사회에 대한 의견 등을 포함하여 자유로이 이야기하는 방식으로 이루어지고 있습니다. 또한 이번이 첫 보고이기에 인터뷰 내용을 어떻게 요약할지, 멤버들 사이에서 시행착오를 거치고 있는 중이지만 실제로 어떤 식으로 인터뷰를 이끌어 나갈 지에 대하여 저의 경험과 감상을 중심으로 소개하고자 합니다.

지금까지 저는 일본어학교 학생 3 명과 한국계 기업에서 일하시는 3 명을 대상으로 인터뷰를 하였습니다. 성별은 여성이 4 명, 남성이 2 명이었으며, 나이는 21 세부터 33 세, 일본에 온 시기는 한명이 1998 년이고 나머지는 2002 년 이후에 온 분들입니다. 6 명의 공통된 점은 전부 일본 생활의 첫 걸음을 일본어학교에서 시작했다는 점입니다. 일본에서 공부하는 한국인 유학생은 19.605 명으로 중국 다음으로 많고 유학생은 132.720 명(2009 년)중에 15%를 차지하고 있습니다. 한국의 젊은 세대들은 일본어학교를 거쳐 대학이나 전문학교에 진학, 또는 취직하는 등의 라이프코스를 거쳐 나가는 경우가 많다고 생각되어집니다.

처음에는 아는 사람에게 일본어학교 학생을 소개 받아, 그 다음은 그 사람으로 부터 친구를 소개받는 스노볼방식으로 진행하고 있습니다. 처음에는 면식이 없는 사람과 만나므로 잘 만날 수 있을지, 혹은 초면인 저의 인터뷰에 응해줄 지 염려되었지만, 지금까지는 인터뷰에 협조해주신 덕분에 순조롭게 진행되고 있습니다. 인터뷰를 시작하기

전, 프로젝트에 관하여 팜플렛의 내용을 설명하고 인터뷰를 IC 레코더에 녹음하는 것, 문자화한 내용을 다시 확인하는 것, 그리고 그 내용을 홈페이지나 인쇄물에 공개하는 것을 명시한 동의서에 사인을 받은 뒤에 인터뷰를 시작합니다.

인터뷰 내용에 대해서는 보고서의 항목을 참조해 주시기 바라며 여기에서는 제 자신이 인터뷰를 하면서 인상 깊었던 점을 쓰도록 하겠습니다. 그것은 그들의 가족관이나 사회관, 인생관과 한정된 미디어나 문헌정보를 통해 형성된 저의 “한국관”사이의 차이입니다.

처음에는 인터뷰를 한 사람들은 일본(해외)에서 배우며, 일한다는 의미에서, 보통의 한국인과는 다를 지도 모른다고 생각했습니다, 그러나 그들의 이야기에서 등장하는 가족이나 친구의 언어들 속에서, 저의 스테레오타입적인 한국의 이미지를 기분 좋게 배신당하는 것들이 많이 있었습니다. 조사를 실시하고, 그것들을 분석해서 문자화 하는 중에도 현장은 변화하고 있습니다. 조사연구와 현장과의 사이에는 결코 매꿀 수 없는 시차가 계속 존재합니다. 이 프로젝트에서는, 새로이 이주해 온 한국인의 이야기를 정중히 기록해서, 다양한 뉴커머 한국인의 존재가 보일 수 있도록 하는 것을 목적으로 합니다. 이 이야기를 어떻게 해독할 지는, 읽는 여러분을 포함해서, 저희 연구자들의 다음 작업이 될 것입니다.

현재 제가 기록한 것은, 비록 6 명의 이야기이지만, 한국과 일본이라는 두 나라를 오고 가면서 자신다운 삶을 살고자 하는 마음과 결혼이나 가족규범 사이에서의 고민, 꿈을 쫓는 과정에서의 좌절, 그리고 다시 일어서 나아가는 그들의 이야기는, 당연한 이야기이지만, 사람이 살아간다는 것은 매일 매일 새로운 이야기를 만들어 나가는 것이라는 사실을 깨우쳐 줍니다. 지금부터 소개하는 100 명의 이야기 안에, 읽는 여러분들에게도 새로운 발견이나 공감되는 부분들과의 만남이 있어서 그것이 새로이 이주해 오신 한국분들과의 새로운 “얼굴이 보이는” 관계를 만들어 가는데 조금이나마 도움이 되기를 바랍니다.

# インタビュー要約の一覧／인터뷰 요약의 일람

(インタビュー実施順／인터뷰 실시순)

1. キム・スヒョン(20代・女性)「日韓共同作業を夢見る、作家志望生」(2009年11月)、インタビュアー：呉 p. 11
2. Yさん(30代・男性)「新宿は今の自分にちょうどいい」(2010年1月12日)、インタビュアー：渡辺 p. 14
3. PHさん(30代・女性)「幼稚園は小学校の予備教育？」(2月25日)、インタビュアー：武田 p. 18
4. PYさん(20代・女性)「10月に戻ります」(3月3日)、インタビュアー：武田 p. 21
5. PHさん(20代・女性)「将来の夢はパン屋さん」(3月4日)、インタビュアー：武田 p. 25
6. L・Mさん(20代・女性)「5年間の日本の留学生生活を振り返って」(3月18日)、インタビュアー：呉 p. 28
7. Tさん(40代・男性)「新宿から二度目の出発」(4月3日)、インタビュアー：渡辺 p. 32
8. Tさん(30代・女性)「異国での出産と教育について」(4月9日)、インタビュアー：川村、李 p. 34
9. Annさん(40代・女性)「日本語さえできればたくさんの機会がある国、日本」(4月18日)、インタビュアー：李 p. 37

ご協力ありがとうございます。

협력 감사합니다.

## キム・スヒョン (20代・女性)

### 「日韓共同作業を夢見る、作家志望生」

2009年11月、光州出身

学生（2006年度のみスコリアの美<sup>1</sup>に選ばれる）、日本歴1年半

インタビュアー：呉世蓮（インタビューは韓国語で行われた）

#### <現在の仕事>

今は、学生です。ドラマの作家を志望する、学生です。みスコリアは、職業ではなく、元みスコリアとして社会で活躍するドラマ作家になりたいです。そして将来、批評家の方にも。そのために、日本で、日本の歴史と社会について勉強をしたいです。

#### <日本語の勉強は？>

日本に来る前に、本を読んだりしましたが、韓国の日本語の塾でひらがなから習いました。現在は2008年4月から、日本語学校に1年半くらい通っています。

#### <日本語の習得>

日本語は英語と違って韓国語と文法も似てて、似てる単語も多くて、最初は覚えやすかったけど、勉強をすればするほど難しくって、中国と同じく漢文を使いながら、日本は何か情緒的な意味が入ってるような気がします。

韓国で文藝創作、言語を専攻してきました。言葉を使って創作する仕事をしたいです。意思疎通がうまくいかない日本に初めて来たときに、道を教えてくれる時には、直接連れていってくれたり、身振り、手振りなどで道を案内してくれたことから、言葉についてももう一度考えられるチャンスだったと思います。日本は近い国ですけど、言葉を発しないと日本人なのか、韓国人なのか区別付かないじゃないですか。言語を使えない状態で人々と意思疎通をした経験があったからこそ、日本人のことが好きになったというか（笑）人と人として。

#### <いざ日本に来てどうだったのか>

韓国と似てるところもありますが、韓国よりは外国人が生活するところが

---

<sup>1</sup> 韓国では「眞・善・美」と順位を付ける。

多く、日本は日本という一つの国ではなく、一つの世界？と表現しても言い過ぎではないと思います。島国である日本は、多様な国の文化があるという、多文化といいますか、アジアでありながら、西洋的な雰囲気とアジア的な雰囲気、日本ならではの個性だと思います。知れば知るほど、宝物の倉庫のように、面白いことがいっぱいです。

あと、マックの店員さんが、50、60代のおばさんが、少女のように明るく挨拶をしながら、「いらっしゃいませ」というのを見て、とても驚きました。50、60代の方がファーストフード店で働くのを見て、日本から生命力と尊敬心を感じました。韓国では絶対見られない光景ですから。

#### <日本に来て大変だったことは？>

雰囲気がとても自由にみえて、若干は感情を表現するには、とても自由でした。しかし、厳しい社会的な雰囲気？個人主義？そのため、大人しく何かの行動をとるべき責任感を感じました。この点で、自ら成長できたと思います。

#### <どのようなところが厳しかったのか？>

韓国ではバイトをしたことがなく、私の年齢と近い日本の若者の会話や関心分野など知りたくてバイトをしました。私より若い学生たち、高校生たちが親に頼らず、生活費は簡単に自分で解決しながら、学業を進めていました。その歳に、私は学校だけ通い、親からお金をもらい、私の生活のすべてを親に頼って解決したため、私より年下でも、先輩のような姿、学ぶところのある先輩だと思ったこともあります。自ら独立心を育てようと。このようなところでは、反省もしたり、経済的な観念も、現実的になったともいえます。

#### <韓国人が多いといわれる新宿にはよく行くのか？>

池袋に住んでいまして、新宿、新大久保はとても親近感があります。多様性を持っていながら、人を安らかにしてくれる雰囲気があって、よく待ち合わせの場所として人が集まるのだと思います。

新大久保の韓国人のマーケットには、月一回くらいは行きます。韓国人ですけど、実は新大久保にはあんまり行かないようにしているのです。その理由は、日本語を習いに来たため、なるべく韓国の文化とは接しないようにしているからです。やっぱり日本のキムチと韓国のキムチは違っていて、キムチを買うためには新大久保に行くしかないと思います。そして、他の日本人の友達や中国人の友達に韓国料理を作ってあげたり、何か韓国について知ってもら

いたいという韓国人の欲求といますかね、韓国を知ってもらうためには、やっぱり料理ですよ？（笑）

### <これから日本にずっといるのか？>

一応、韓国に帰り、ドラマ作家の仕事を習い、ドラマ作家に関する仕事をして、30歳初めに、私の名前でドラマを書けるようになったら、自分の作品を、日本に輸出するか、それとも日本と韓国で共同制作をしたいと思います。そのため、日本語を通訳してくれる人がいなくてもいいように、ひとりで直接交流したくて日本語の勉強をしているわけです。

### <日本社会に対する要望>

個人的な話で、笑ってしまいますけど（笑）

公共施設などを大きく作ってもらいたいです。生活施設？マンションのキッチン、バスなどは若干低いといますか…

あと、日本は多文化であり、世界の文化が組み合わせられて素敵だと思いますが、ちょっと批判的な言葉でいうと、模倣の国という人もいるほど、その弊害が危険ではないかと思うこともあります。日本の伝統的な部分？昔のものをもう少し生かして、昔の雰囲気をいかせる施設と環境に少し力を入れるとさらに素敵な社会になるのではないのでしょうか。

### <最後に>

学生として日本をこのように体験して、日本の現地の人のように、同じく生活をし、同じく働いてお金を稼いで生活をしました。これからは仕事として来日をし、まさに文化を体験したわけなので、日本に対する誤解がうまれないような文化交流ができるようにしたいです。なぜなら、日本が好きになったわけではなく、日本人たち、バイトをしながら日本人が好きになったので、人と人との関係を築きあげながら交流をしたいのです。

## Yさん (30代・男性) 「新宿は今の自分にちょうどいい」

2010年01月12日、太田出身、自営業、日本歴通算11年目

インタビュアー：渡辺幸倫

Yさんとは彼が来日する前からの14年来の友人。これまで、いろいろと遊んだり助け合ったりしてきた。最近はお互いに忙しくなって、会うことも少なくなってきたので、この機会に話せたのはとてもありがたかった。

### <今の仕事>

Yさんは以前、エンジニアとして会社に勤めていたこともあったが、自分でビジネスをやることに興味を持ってから一念発起。現在は4つの仕事をこなす忙しい生活をしている。

「1つは、韓国からの依頼を受けて日本で一部の仕事をして、またそれを送り返すという仕事。もうひとつは、ある健康食品の流通関係のネットワークビジネスの仕事。で、みつつ目が、いわゆる自分の知り合いで仕を探してる人の相談に乗ってます。あとは、最近頑張ってる仕事がありまして、韓国に投資しようとしている会社の仕事を手伝ってます。」

### <日本での人とのつながり>

そんなYさんが大事にしているのは人脈。この人脈が広がるのと同時に現在の4つの仕事へと繋がっていったという。なかでも、もっとも大事にしているのは教会関係。Yさんはキリスト教の信者で、はじめに日本に来たときからずっと熱心に教会に通っている。奥さんともそこで出会ったし、教会では同世代の人、先輩世代の人、後輩世代の人と幅広いつきあいがある。

「今の人間関係では、教会の人間関係が一番。12年前に日本にきたときからずっと続いているから、教会の信頼関係が一番深いですね。家族ぐるみの付き合いは教会が多いですね。ほとんど教会です。」

他にも仕事上の人間関係も広がっている。仕事関係では日本人とのつきあいが多く、日本と韓国の間を取り持つ、日本人同士のビジネスの間に立つなど様々な形がある。今後はいわゆる在日韓国人の知り合いも作っていききたいという。まだまだ人脈は広がっていきそうだ。

ただ、人との出会いはいつも楽しいものとは限らない。イライラすることもある。

「ひとつは日本人。被害意識を持ってる日本人。もちろん在日もそうなんですけども、いつも韓国と日本を比べるんですね。別にそうしなくていいんですよ。なのに、わざわざ韓国の悪い点を見つけ出して、『日本はこうなのに、韓国はこうでしょ？』っていう感じでいう人はいますよね。わざと傷つけるんですよ。」

言っている人に悪意があるとも思わないけども、「だからどうしたいの？」といつも思うという。このような思いは、Yさん自身が、ちゃんと目的・目標を意識して日々を送ることを大事にしているところからくるようで、Yさんと同じように韓国から来た人に感じる時がある。

「最初来たときには、光ってたんだけど、マンネリになっちゃって。他の人がなんかやろうとしたらネガティブ発言をするんですね。『おまえさあ、そもそもだめだろ？』って感じで、言うんですよ。口出すんですよ。別に口出さなくてもいいのに。わざわざ自分の失敗の背景があるから、他の人にそれをやらせてあげないんですね。『やらせてもいいのに。成功するかもしれないのに』っていう感じで、自分は駄目なのに、他の人も駄目にさせる人。そんなことを見てたら自分も口出したくなりますね（笑）」

こんな態度をとってしまうことの多い私は、自分のことをいわれているようで実に耳が痛かった。

### <人生を変えたフィリピン留学と日本への旅行>

Yさんの現在のよう姿勢はどこから来ているのか。これまでの人生の中で影響を受けた出来事について聞いてみた。まず語ってくれた事件は、フィリピンへの英語留学。聖書について英語で勉強するサークルに入っていたYさんは英語の勉強にも興味を持っていた。きっかけは90年代初め、大学一年生の夏休みが終わった頃だった。

「先輩の何人かが、アメリカ、フィリピン、タイに行ってきたよ、など言ってたんです。『えー、行けるんだ！』と思って。そこで自分も『どんな風になればいけるんですか』と聞いたら、『まず軍隊に行かないといけない』って。じゃあっと思って、先に軍隊に志願したんですね。韓国は軍隊制度があって、それが終わらないと海外に行くのが厳しいんです。だから、先に申請



して、1年生終わったところで軍隊に行ってきました。」

その後、先輩をつかまえては話を聞き、ガイドブックを読みあさって情報収集をした。情報の他に必要だったのがお金。お金を貯めるために大学を休学したいと相談したところ両親が出してくれたという。このフィリピン留学でYさんの世界観に大きな変化が起こった。

「向こうの人も外人だから変な目で見るとはですね。(乗り合いの)ジープに乗れば、自分だけ外人だから。みんな見るんですよね。自分から見ればみんな泥棒みたいで、『え、後進国の人でしょ』という感じで。はじめはね。」

当時持っていたという自分の偏見を隠さず話す。それが2ヶ月後には。

「フィリピン人でもいろんな人がいるということ。外国人に対してもアメリカ人はこう、とかフィリピン人はこうとかそういうイメージがなくなって。あんまり変わらないんだ。そういう風に思えたんですね。これでかなり自分の人生観が変わりました。365日24時間、全てが変わってく時間でした。フィリピンというところは。韓国の姿勢からフィリピンという韓国ではないところに移って、新しい目線で韓国を見るようになりました。」

当時の興奮が伝わる。大学4年生になった時には、交換留学で韓国に来ていた日本からの留学生を訪ねて初来日。情報はその留学生からもらったけども、やはりお金は問題。もう親には頼れない。

「ひらめいたのは、3年生の時にキリスト教のサークルの役員をしていると活動していたんですが、そのサークルの役員用の職員室。そこに行って、理由を説明して、『お金がないんです』って行ったら、『50万ウォンの奨学金きたからあげるー』って。『ありがとうございます!』となってね。」

話は簡単そうだが、この経験の影響は大きかった。Yさんは直ぐに現在と結びつけてまとめてくれた。

「計画書がちゃんとあれば。やり方がわかったんですよ。フィリピンに行く前から何回かやってくうちに自分のものにした訳だから。今も同じで、今すぐフィンランドとか北極圏に行っても生きて行ける自信を持っているんです。今も投資会社の仕事では、『かなりお金があるんだけど、逆に投資先がないから困っている』状態なんです。『こんなお金、どうすればおろせるの?』と考えても、プロジェクトがないと動かせないんです。それで、『いい計画書がないといけないんだ。プロジェクトがあれば、いくらでもお金がもらえるんだ』って。同じことを分かったんです。レベルは小さいけどやり方は同

じ。フィリピンにいった経験、日本の旅行の経験からですね。」

ちなみに Yさんと私はこの日本旅行の際に出会った。釜山からの船に乗り合わせたのだ。その時には Yさんは日本語を全く話せなかったの、英語やつたない韓国語、日本語で語り明かした。日本上陸後も広島までの間だったが旅程をともにした。もちろん、まさか 10 数年後に今日のような日が来るとは思いませんでした。

<将来について>

「自分は、これからはずっと日本に住むつもりはありません。逆に他の国でずっといることも考えていません。私は日本人ではなく韓国人ですが、その前に地球人です。10 年前なら私は『日本か韓国かどっちかに決めなきゃいけない』と思ってたけど、今はどちらにしろ同じです。どちらの国にいても自分の生き方があるから、家族が安全でいい暮らしができていい教育環境でいい経験をつめるところだったらどこでもいいかなと思います。特に日本でも韓国でもお金がある程度あったら関係ないです。」

あくまで自分の生き方ができる場所に住みたい。こんな思いが伝わってくる。今後も日本にこだわらないと言うが、現時点で新宿が Yさんのいう「いい経験をつめるところ」ということなのだろう。

Yさんとは初めて会った頃に、「いつか子どもができれば、交換してホームステイさせよう」と約束をしていた。彼には既に 3 人の子どもがいるが、私はまだなので、最近はいつも頑張るように言われてしまう…。録音したインタビューの時間は 70 分ほどだったが、インタビュー前後にも最近の話をいろいろして実に愉快的な夜だった。

## PHさん (30代・女性) 「幼稚園は小学校の予備教育？」

2010年2月25日、ソウル出身、日本語学校生、日本歴1年

インタビュアー：武田里子

### ◇ 略歴と家族 ◇

PHさんは1976年生まれの34歳。4人きょうだいの末っ子で、自宅はソウルの景福宮の近くにあり、子どもの頃はきょうだいや友だちと公園などでよく遊んだ。学校が休みの時には、釜山にいる叔母（母親のきょうだい）のところに泊りに行き、いとこたちとおいしいものを食べたり、一緒に遊んだ楽しい思い出がたくさんある。両親は72歳。今のところ健康で、2人で旅行に出かけたりしているが、PHさんが一日も早く帰国するのを心待ちにしている。

一番上の兄は旧ソ連に留学したことがある。その影響があったのかもしれないが、ずっと海外で暮らしてみたいと思っていた。大学を卒業後、小学校の教員として働いたあと、幼稚園に転職した。自分の適性としては、幼稚園の教員に向いていると思うし、幼児教育の重要性を感じている。子どもたちに遊びを通じた友だちとの関係づくりや情操教育をしたいと思っていた。しかし、実際に仕事を始めてみると、保護者からは遊びよりも小学校に入ってから勉強に役立つ教科学習に力を入れてほしいというプレッシャーが強く、PHさんが思い描いていたような幼児教育を実践することは難しかった。また、問題行動が目立つ子どもは、親に原因があることが多いと感じるようになった。理想と現実のギャップ、幼児教育を通じて見えてきた親子関係の問題などを考える中で、カウンセラーへの興味がわいてきた。カウンセラーになるためには、心理学を勉強しなければならない。

心理学を学ぶだけなら韓国の大学に入ればいい。でも、PHさんには、留学してみたいという年来の夢もある。そんなPHさんにとって日本に留学して心理学を学ぶことは自然な成り行きだった。しかし、その夢の実現の前に立ちふさがった最初の関門は家族の説得だった。家族に了解をもらうまでに2カ月ほどかかった。家族には安定した仕事についているのに、なぜ、留学する必要があるのかが理解できないようだった。それでも最後は、「今できることをしっかりやったらいい」と送り出してくれた。

#### ◇ 韓国の幼児教育の問題点 ◇

韓国の受験競争の激しさはマスコミにもよく取り上げられるが、そのため幼稚園は小学校入学前の予備教育機関としての位置づけが強く、保護者もそれを望んでいる。そのため幼稚園では、子どもたちを集めるために、ハンゲルの読み書きや算数だけではなく、英語教育も取り入れなければならない、そのために外国人教員を雇っているところもある。

幼稚園の教員の給与は、日本円に換算すると、公立が 24 万円、私立だと 20 万円前後。給与は小学校の教員の方が高い。PH さんが勤めていた幼稚園は、5 歳児クラスが 20 人、6 歳児クラスが 25 人、7 歳児クラスが 30 人だった。5 歳児は 2 人の教員で担当するが、6 歳児と 7 歳児は担任が 1 人になる。

最近では園児の 8 割は一人っ子である。韓国では教育費にお金がかかるため一人っ子が多い。しかし、一人っ子の子どもたちを見ていると、きょうだいで遊んだ経験がないため、我慢をしたり、おもちゃを他の子に譲ったりすることができなかつたり、どうしても自己中心的になりがちで協調性に欠ける傾向がある。PH さん自身は、一人っ子は良くないと感じている。

子どもたちは 9 時に登園し、午後 2 時に退園する。教員はそのあと翌日の教材準備や親との連絡などがあるので、帰宅できるのは早くても 6 時。遅い時は 8 時を過ぎることもある。10 年間の教員生活は、とにかく忙しかった。子どもたちの問題により深くかかわるためには、カウンセリングスキルが必要だと感じていたが、立ち止まって考えたり、勉強する余裕はなかった。

#### ◇ 日本での暮らし ◇

2009 年 4 月、中野にある日本語学校に入学するために来日した。初めての来日は 1997 年に大阪にいる友だちを訪ねた時で、その後、観光で 2 回ほど来日したことがあるので、日本は「外国」という感じはしない。日本は近いし、特に大久保には韓国料理の店や食材店も多いので、生活に困ることはない。ただ、物価が高いので、経済的にゆとりがないと生活するのはなかなか大変である。当面の目標はとにかく来年大学に入学すること。昨年日本語能力検定試験の 2 級に合格したので、今年は大学入試に必要な 1 級にどうしても合格したい。

来日してしばらくの間は、韓国人で日本の大学を卒業して働いている友だちのアパートに居候させてもらい、その後、アパートに移った。アパートは大久保駅から歩いて 5 分なので学校へ行くにもアルバイトに行くにも都合がよい。家賃は 5 万 4000 円。夕食は簡単なものを自分で作って食べる。大久保にはたくさん韓国料理のお店があるが、韓国に比べるととても高いので外食することはめったにない。

一番の悩みというか苦勞しているのはアルバイトと勉強を両立させることだ。日本語学校の授業は午後 1 時 20 分から 5 時までで、アルバイトを 2 つ掛け持ちしている。一つは高田馬場にある弁当屋さんで、早朝から昼まで週 4 日働いている。時給は 950 円。このアルバイトのよいところは、朝ごはんはんと昼ごはんが食べられることである。もう一つは、週 2 回、韓国人夫妻の幼稚園児と小学生に韓国語を教えている。アルバイトは、韓国人留学生向けのウェブサイトですぐに見つけることができた。生活費はアルバイトで何とかやりくりしているが、授業料(年間 60 万円)は貯金を取り崩している。リーマンショックでウォンが下がった時には、このまま留学を続けるかどうか迷った。

東京で困った時に相談できる韓国人の友だちが 2 人いるが、日本人の友だちはいない。日本人の友だちが見つけれないのは、まだ、自分の気持ちを日本語で上手く伝えられないことと、時間的に余裕がないためである。気分転換したいときは韓国人の友だちと会っておしゃべりをする。趣味は、散歩をしながら写真を撮ること。

#### ◇ 将来の夢 ◇

大学を卒業したら韓国に帰って、政府系の教育関係の研究所で働きたいと思っている。でも、競争が厳しいので上手くいくかどうか分からない。他の選択肢として心理学の研究が進んでいるドイツに留学することも考えているが、年齢的に難しいかもしれない。日本での生活は大変なことが多いが、夢があるから頑張れる。

## PYさん(20代・女性)「10月に戻ります」

2010年3月3日、蔚山出身、日本語学校生、日本歴1年  
インタビュアー：武田里子

### ◇ 略歴と家族 ◇

PYさんは、1988年生まれの21歳。韓国の大学を休学して2009年4月に来日し、中野にある日本語学校の1年プログラムに入学して日本語の勉強をしていた。「していた」というのは、このインタビューの数日後に帰国することが決まっていたからである。4月に休学中の韓国の大学に復学し、卒業論文を書き上げて、10月に再来日する。そして、来春、日本の大学に入学する計画を立てている。昨年、日本語能力検定試験の2級に合格したが、日本の大学に入るには1級が必要だと言われている。韓国に帰っても日本語の勉強を続けるつもりだ。PYさんは韓国の大学では文学を専攻しているが、実は、文学にはあまり興味が無い。文学部に入ることになったのは、大学入試の結果によるものだった。だから、日本の大学では、本当に勉強したかった経営学部に入るつもりだ。

出身は釜山に近い蔚山で、共働きのサラリーマン家庭で育った。大学生の兄と二人きょうだいである。子どもの頃は、両親が仕事から帰ってくるまでは祖母が面倒を見てくれた。PYさんが小学校に入るところから韓国では受験競争が激しくなり、PYさんも小学5年から塾に通い始め、その他にピアノや美術の教室にも通った。中学時代は、塾から帰宅するのは夜9時頃で、試験前には夜中の2時頃まで塾で勉強した。それは、PYさんが特別だったわけではなく、他の子どもたちも多くが小学校から塾に通っていた。ただ、子どもたちはなぜ勉強しなければならないのかよくわからず、みんなが行くので塾に行っていたような気がする。だから塾では勉強ばかりしていたわけではなく、塾は他の子どもたちと「遊ぶ場」でもあった。

PYさんは、高校2年の時、1年間、選択科目で日本語の勉強をした。理由は、日本の芸能人に憧れたからだ。特にジャニーズが好きで、雑誌に掲載されたジャニーズの記事が読みたくて日本語を勉強した。日本の芸能人が好きな友人が他に3人ほどいて、その友人たちと雑誌を回し読みしたり、インターネットで調べたり、NHKの番組を見たりしていた。3年生の時は、受

験勉強のために一旦、日本語の勉強は中断したが、大学に入ってから来日するまで1年半ほど日本語の塾に通った。だから、来日した時には日本語での日常的なコミュニケーションには困らなかった。ただ、「韓国で習ったことが、日本に来てみたら意味が違うことがあったり、使い方が違うことがあって戸惑った」という。

2009年に留学で来日する前に、観光で4回ほど来日したことがある。日本に留学中の友だちを訪ねたり、東京、千葉、福岡、熊本などを旅行した。釜山と福岡の間はフェリーが運航されているので、釜山の近くに住んでいる韓国人には九州は身近な場所である。PYさんには在日の親戚はいない。家族に日本語のできる人もいない。

#### ◇日本での暮らし◇

日本で暮らしてみても、一番困ったことは日本の天候だという。日本の夏の蒸し暑さには閉口した。それと物価の高さ。生活費を補うためにしゃぶしゃぶ屋さんでアルバイトもした。一日のうち、アルバイトに5時間、学校の授業が4時間。それに移動などを加えると自習時間を確保するのは大変だった。日ごろのストレスは、週末に友だちとおしゃべりをして発散した。相手は同じ日本語学校の韓国人生徒がほとんどだが、仲の良い台湾人もいる。日本人の友だちと話せば日本語の勉強になると思うが、間違っていないだろうかとか気にしながら話すことになるので、疲れているとそのエネルギーがわいてこない。時々、インターネットのサイトで案内が流れる留学生と日本人がおしゃべりをする会に参加することもある。こうしたイベントは、留学生と日本人の数がだいたい同じで会話練習になることもあるが、日本人参加者が少なくて、韓国人同士のおしゃべりで終わってしまうこともある。

日本で暮らして驚いたことは、「吉野家」みたいに食堂で一人でご飯を食べる人が多いことだ。韓国では、一人で食事をしたり、映画を見たりすることはあまりない。最初はさびしい感じがしたが、しばらくしたら、一人でいる時間がほしい時とか、疲れた時に簡単に食べて帰れるので便利だと思うようになった。かつ丼やお好み焼きなどを自分で作ることもある。日本の食べ物と言えば納豆がある。4～5年前から韓国でも、健康ブームの影響でデザートなどで納豆が売られていることは知っていたが、食べたことはなかった。日本に来て初めて食べてみたが、意外に美味しかった。もう一つ驚いたこと

たとえば、女性が喫茶店や子どもと一緒にいる時にタバコを吸っている姿を見かけたことだ。「韓国ではタバコを吸う女性に偏見があるので、女性は男性の前や親の前では吸わない。」

#### ◇ 仕事・恋愛・結婚 ◇

PYさんは大学3年生。人間としても、女性としてもこれからどう生きていくかについて悩むことが多い。今後の人生プランについては、「したいものはいっぱいありますけど、できるものがあまりなくて、いつも迷っています。結婚は、前はしたかったけど、今は30代以上になってからしたいし、就職前にもっといろいろな国に留学したい」。韓国では英語熱が高まっている。確かに大学生の間で英語圏への留学を考えている人も多く、なかには、留学する前に、ウォーミングアップを兼ねてフィリピンで英語の勉強をする人もいる。直接、英語圏に行くよりも、物価の安いフィリピンであれば英語を1対1で教えてもらえるからだ。PYさんの兄も4カ月ほどフィリピンに英語留学した。お兄さんも大学卒業後に留学を考えているという。ただ、そうした英語ブームについては、韓国国内でも本当に必要性があるのか、単なる浪費ではないかといった批判もあるという。

結婚や恋愛は、女子学生の間でよく話題になるテーマである。PYさんの母親は、子育てと仕事を両立させてきたので、PYさんにも自立した人生を歩むことを期待している。PYさん自身も結婚後は両親のように共働きをすることになるだろうと考えている。韓国も日本と同じように未婚化の広がりや離婚率の上昇、出生率の低下など家族の問題がクローズアップされている。PYさんはそうした現状に対して、「私がしたいものと考えたら結婚は遅くなります。でも、社会全体を考えたら、良くない傾向だ」と感じている。「もっと勉強したいし、自分が欲しいものを大事にしたい。本当に信じられる人でないと結婚したくない。離婚は嫌ですから。死ぬまで幸せにしてくれる人じゃないと私は結婚しない」という。女性としてどう生きるか、自分の可能性を追い求めることと、家族規範や性別役割規範とどのように折り合っていくのか。また、PYさんによれば、韓国では、「自尊心の高い」男性がデート費用を払うのが一般的なので、経済的に余裕がない男性はなかなか異性と付き合えないという。一方、女性の方は、美容には惜しまずお金を使う傾向がある。「韓国の男性は、まずは女性を容ぼうで判断することが多いからだ」



という。PYさんの生き方や恋愛や結婚への迷いは、社会的経済的制約を受けながらもよりよく生きたいと願う点で、国籍を問わず同世代の女性たちが共通して直面している課題のようだ。

## PHさん(20代・女性)「将来の夢はパン屋さん」

2010年3月4日、ピョンテク出身、日本語学校生、1年目

インタビュアー：武田里子

### ◇ 来日までの略歴 ◇

PHさんは、1980年生まれの29歳。出身はソウルから車で50分ほどのところにある京畿道のピョンテクである。両親を早くに亡くしたPHさんは、大学を卒業するまで兄と二人で暮らしていた。大学卒業後は、韓国の総合家電・情報通信メーカーとしてはトップクラスの大手企業に就職した。勤務地が実家から離れていたため社員寮に入ることになり、初めて一人で暮らすことになった。会社は、有名企業だったが、担当していたのは一般事務の仕事だったので、「毎日毎日同じ仕事でつまらなかった」という。本当は営業など外で働く仕事がしたかったが、チャンスに恵まれなかった。27歳で退職した時は、「あまり先のことを考えていたわけじゃなかった」。結婚という選択もあったが付き合っていた彼から、日本に留学しようと誘われ、2009年4月に来日した。

PHさんは、「私は日本には来たいですが、留学は全然考えたことがありませんでした。観光は良いですが、暮らすのは大変だと聞いていましたから。でも、ヨーロッパとか、アメリカも留学するのはどこも大変でしょう。それなら同じアジアにある日本が良いのかなあ」と思ったと留学することになった経緯を語った。日本が良いと思った理由は、日本語で上手く説明できないと言いながらも、「韓国より経済が上だし、女性のためのいろいろな文化もたくさんあるし、他の国より働いたり、勉強したりすることができる」と感じたからだという。また、ソウルには日本留学する人たちのための「留学院」がたくさんあり、来日前に入学する学校や学生寮も決めることができる仕組みがあるので、日本に留学することは、それほど難しいことではない。日韓の人の往来が増えていることも日本留学に対する心理的な壁を低くしている。

それでも、実際に留学するまでには、いろいろと下調べをし、来日する1年ほど前には彼と下見にも来た。PHさんはその時が初めての来日だった。彼の方は、大学時代に1~2回来日したことがあり、PHさんを留学に誘っ

た手前いろいろと責任を感じているようである。

#### ◇ 日本での暮らし ◇

今のところ、生活上の問題は二人で協力して解決している。下見で来日した時の滞在は3日間と短かったので、新宿や原宿などJR山手線沿線を少し見て回った程度である。その時は、「東京は新しく韓国より良い所だ」という印象をもったが、実際に生活してみると大変なことが多い。大変というのは、アルバイトをしながら勉強をする生活のことである。アルバイトもなかなか見つけられなかった。「お店も若い人たちが欲しいので」と、年齢がハンディになったという。来日して3カ月ほどは貯金を取り崩して生活した。その時は、彼の方も仕事が見つからなかったので、資金が続くかどうか不安で韓国へ帰ることも考えたという。今、アルバイトをしているお弁当屋さんの求人募集はネットで見つけた。朝4時半から11時半まで働き、そこで昼食をとり、午後からは日本語学校で授業を受ける。PHさんも彼も授業の出席率は100%である。大久保のアパートの家賃は6畳一間で6万8千円と高いが、学校までは徒歩7分と近く、アルバイト先にも徒歩で通えるので我慢している。

PHさんの通う日本語学校は98%が韓国人である。PHさんのクラスも15名中14名が韓国人でロシア人が1名という構成である。唯一のロシア人は、PHさんによると「韓国人が好きじゃないみたいで、あまりしゃべらない」という。14人の韓国人の中でアルバイトをしているのはPHさんを含めてわずか3~4人で、他の人たちは家から送金してもらっていることを知り、「お金持ちがたくさんいることに驚いた」という。学校には不満がある。来日前の説明では、年に2回は日本文化を体験するプログラムがあると聞いていたが、そうしたプログラムはなく、「がっかりした」。

PHさんは、自分だけでなく日本語学校の生徒たちはなかなか日本人との接点を持ってないという。学校の中で出会う日本人は先生だけ。交流イベントなどで出会った日本人とは、その時だけで終わってしまい、その後も続く関係を作るのは難しい。クラスメイトの中には、専門学校や大学に進学できれば、今度は日本人の方が大勢になるから自然に友だちができるという人もいる。PHさんは知り合いから、「日本人を紹介してあげるけど、日本人と友だちになるにはお金がかかる」と言われたことがある。確かに「一緒に食事

をしたり、飲んだり、話したりするとお金がかかる」ことは分かるが、PHさんはそういう形で友だちを作ることには気が進まない。

#### ◇ 将来の夢 ◇

PHさんの日本語学校は、2年プログラムなので、あと1年はとにかく日本語の勉強に専念して、大学に進学するつもりだ。大学では経営か経済の勉強をしたいと思っている。インターネットでいろいろな大学の学費や奨学金制度、就職状況などを調べているが、まだ、どこの大学を受験したらよいか決められずにいる。まずは6月の試験までは勉強に専念し、その後は、旅行もしてみたい。まだ、来日してから東京以外に出かけたことがないのだ。PHさんにとって、今一番気がかりなのは、4月からは授業が午前中に変わるので、お弁当屋さんのアルバイトができなくなることだ。また新たにアルバイトを探さなければならないが、上手く見つけられるかどうか不安を感じている。

PHさんの将来の夢はパン屋さんを開業することである。なぜ、パン屋さんかというと、初めて来日した時にコンビニで買ったパンの美味しさにびっくりしたからだ。韓国の専門店のパンより柔らかくて美味しかったという。日本では、専門学校を卒業してもパン屋で働くためのビザはとれないと聞いているので、たぶん韓国で開業することになる。大学で経営の勉強をして、専門学校でパン作りの勉強もするとすると、PHさんの夢が実現するまでにはまだ7~8年かかりそうだ。「大変ですね」という私に、「大丈夫です」とほほ笑んだ。

## L・Mさん (20代・女性)

### 「5年間の日本の留学生生活を振り返って」

2010年3月18日、ソウル出身、学生、5年目

インタビュアー：呉 世蓮（インタビューは韓国語で行われた）

#### <来日したのは、いつ？>

2005年、高校を卒業して、すぐに来日しました。

#### <いざ、日本に来てどう？>

私は、日本に住みながらいつも楽しかったと思います。帰るのがさみしいほどです。周りの人の目をあまり気にしなくていいこと、これは暮らしやすいと思います。

#### <お友達>

韓国で日本への留学を目指している学生たちが通う塾があります。高3の時、この塾で知り合った友達と一緒に入試準備をしながら、日本にある日本語学校も一緒に通いまして、それぞれ日本の大学に入学したため、日本に住んでいる韓国人の友達が多いです。

時間さえ合えば、会おうとしているので、月2、3回くらいは会っていました。初めて、来日した頃は、友達と一緒に暮らしました。日本語学校に通っていた1年間は友達と日本語学校の寮に、一緒に住みました。

#### <寮での生活>

部屋の三つある寮でした。一つの部屋に友達と二人で暮らしました。6人が一戸建てに住みました。しかし、一緒に勉強を、同じ目標を目指して、勉強をしたので、互いに見えない競争心があったと思います。ちょっと心理戦のような？大学に入学する前まではこのようなことがありました。

お互いに、大変だった経験などを共有しているので、家族より、一番理解してくれる人はこの友達です。私にとって欠かせない、一番大切な存在とも言

えます。

### <日本人の友達>

日本人の友達が多いとは言えませんが、ゼミに入ってから増えた気がします。女性教育と日本教育史の専攻の、ゼミ生の年齢がけっこう高いです。30代の友達も、20代後半の友達もいて年齢が多様で、楽しいです。

ゼミ生はみんな日本人で、中国の留学生が二人います。同じ外国人の留学生同士で、共感するところも多く、よく会ってご飯に行ったり、遊びに行ったり、仲良しです。友達との関係で、言語の壁を感じたことは、男の友達が略された言葉を使ったり、俗語など、理解できなかったこともあります。笑いながら対処しました。(笑) それとも、女の子の友達に聞いたりしました。

### <韓国人の友達、日本人の友達、中国人の友達のそれぞれの違いはありますか？>

韓国人の友達の場合は、高校三年からの友達だったため、幼なじみで、ずっと一緒に生活をしてきたわけなので、楽ですけど、日本人の友達は大学に入学してから、大人になってから出会ったため、すでに価値観などが形成された状態で、仲良くなるのって簡単な事ではありませんでした。言語も違って、最初はどうやって近付けるのか、難しかったです。私の場合、友達が先に声を掛けてくれたので、仲良くなれたと思います。

性格というより、言葉のニュアンスの問題ですが、私の考えと違って、違う意味で受け取られたこともありました。これが一番難しかったと思います。韓国に帰ってもずっと連絡をとり、お互いに行き来しながら、交流していきたいです。

### <大学生活で感じたこと>

友達との関係で、得られたことも多く、学んでいることも多いと思います。正直なところ勉強以上に、新しい人々に出会い、この人々は、これからの一生の人達なので、大切なものを得たと思います。

### <よく行く場所は？>

新宿です。約束があると、いつも新宿で待ち合わせします。新宿は出口に

よって雰囲気が違うので、会う人によって、出口だけ変えて会ったりします。新宿の魅力は、多様な雰囲気、そして便利な交通だと思います。

#### <友達とコリアンタウンである新大久保に行ったことは？>

私が韓国の料理が大好きなので、いつも友達を連れて行きます。初めて行った日本人の友達は、辛いと言いながら、みんな美味しいと言ってくれます。韓国の文化についてよくいろいろ聞かれたりします。ゼミには韓国人が私しかいないですが、大学の先生が韓国が大好きで、授業中にも韓国についての話がよく出るので。それで、友達も自然的に、みんな韓国の文化に興味を持ち、好きになったみたいです。

#### <バイトの経験は？>

日本語学校に通ったころは、ドトールでちょっとしました。大学に入ってから、美容整形外科の受付でバイトをしました。たまに、通訳のバイトもしました。展示会や博覧会などで、三日、五日と。ある会社の商品を紹介したり、輸出や輸入など、契約をする時の通訳をしました。

#### <バイトで大変だったことは？>

私が手術したわけではないのに、いきなり電話で悪口をいうお客さんもいたり、自分の鼻を元に戻せという人もいたり、美容整形外科だったので、このようなことが多かったです。美容整形外科なので、絶対、謝ってはいけません。謝ってしまうと、病院側が認めることになるため、対処するのが大変でした。

#### <バイトの経験を通して>

通訳の仕事をしながら、知り合った韓国人も日本人も多く、今も連絡をしながら仲良いです。

#### <将来、具体的な目標、なりたい事？>

正直に、良妻賢母になるのが夢です。結婚する前までは、働きたいです。そのため、同じことが繰り返される仕事より、出張や貿易、観光業のような仕事をしたいです。私が日本に住み、大学も日本で通っていたので、日本と関連した仕事です。

**<日本に来て一番大変だったことは？>**

個人的に、この勉強が私にとって本当に合うのか、そして円高によって経済的な大変さです。しかし、私は運よく、生活費は奨学金で大丈夫でしたが、授業料は、親がいつも送ってくれまして、さらに円高によって親にいつも申し訳なく思いました。

**<日本で良かったことは？>**

自由な雰囲気が、私にとって解放感といいますか、ここに住みながら、一人で強くなったところもあり、私の人生にとって、これまで選んできたことのなかで、日本に来たことを決めたことが、一番よかったと思います。

**<日本の社会に望むこと？>**

留学生としての5年間、感じたことです。私は私立大学で、授業料も高く、お金がかかります。正直に私は、運よく奨学金を貰いましたが、奨学金の機会が多くないです。特に私の学校の場合、外国人を多く受け入れようとしますが、これに対して対策がまだ、足りないと思います。知り合いは途中帰ってしまったり、大変な思いをしながら決めた留学だったのに、このようなケースをみて、心が痛かったです。



## **T さん (40 代・男性) 「新宿から二度目の出発」**

2010 年 4 月 3 日、ソウル出身、会社員、日本歴通算約 15 年  
インタビュアー：渡辺幸倫

### **<来日のきっかけ>**

1965 年生まれの男性。8 人兄弟の 8 番目としてソウルで生まれる。実家は大手の布団屋さん。兄がアメリカに留学していたこともあり、自分もアメリカに行きたいと考えていた。しかし、韓国で教育大学在学中にその兄が帰国してきたので日本留学へと進路を変更。「日本はバブルの時代だったから、ちょっと良いんじゃないかなって思った」と振り返る。

### **<来日当初の思い出：楽しい日々>**

新大久保にあった日本語学校に 2 年通い、その頃に出会った日本人と大学卒業後の 96 年に結婚することになる。T さんが通っていた歯科の衛生士だった。彼女が初めて話しをした外国人は T さんだったという。「最初はデートの時に辞書を何冊か持って。もう漢字わかんなかったら探したりですね」。思い出話に笑いはつきない。日本語学校卒業後には浦和にある短期大学へ進学した。美術を学びたかったが家族の意見を取り入れ経営学を専攻する。卒業後には東京や大阪などに住み、貿易や飲食店などいろいろな仕事を経験した。在日韓国人の親戚とも頻繁に会っていた。当時はあまり日本に外国人は多くなく、いろいろな人によくしてもらったのがよい思い出。「僕は運がいいのかもしれない」と笑ってその頃のエピソードを話してくれた。知り合ったある外食チェーンオーナーに社員旅行に招待されたこともある。そのオーナーとの家族ぐるみの交流はその後韓国に帰国してからもしばらく続いた。

### **<韓国への帰国：成功と挫折>**

99 年、妻の実家のある大阪に住んでいる時に家族の薦めもあって韓国へ。家業をしばらく手伝うが、自立して商売をすることになる。化粧品の輸出入。韓国で製造し、日本や東南アジアなどに輸出、大手ドラッグストアチェーンの店頭で商品が並んだ。特にシンガポールはテレビ広告なども出した思い出の地。仕事が多忙を極めたその時期に離婚。子どもはいなかった。しばらく

すると韓国の大企業が競合品を出すようになり徐々に業績が下がってくる。4年ほどはやった化粧品業に見切りをつけ、友人の誘いもあって2007年に再来日。二回目の日本での長期滞在が始まる。

### ＜再来日とこれからの目標：再出発＞

今回の来日後にも友人の会社をしばらく手伝った後、別の会社に勤めたが、その会社が倒産。しばらく求職活動をしていたが、最近貿易会社に仕事が決まり、現在はビザの申請中。

今後はその会社に勤めながらもお金を貯め、飲食店を開くという希望を持っている。一時期のような大きな会社を経営することまでは望まないが、自分で独立した事業をしたい。飲食店は韓国料理をベースにしたフュージョンをテーマに、競争の激しすぎない少し郊外に開くのがよいだろうと思っている。そこでさらに資本金を貯めて貿易の仕事でも自立する事を目指している。

「結構お金もあったんですけど、それも全部なくしてしまって…。今は大変ですけど、まだ若いから、がんばるしかないなって思って日本にまた戻ってきたんです。これからは、昔みたいな大きな夢じゃないんですけど、がんばってちょっとずつ貯めて食堂をトライして。もともと貿易の仕事ばかり何年もやってたので、それもやってみたいなって思ってるんです。やっぱり資本金の問題で、食堂をやってうまくいったらそれからやるでしょう。」

## Tさん (30代・女性) 「異国での出産と教育について」

2010年4月7日、ソウル出身、主婦、日本歴13年

インタビュアー：川村千鶴子・李 珺鉉

### ◇ 経歴と概要：

1970年大田市（デジョン）生まれ、ソウル周辺の小学校を出る。姉家族を助けるためにシドニーに1年滞在し、その後結婚（1997年）、3度の訪日体験のある夫の希望でともに来日（1997年）、夫は留学生となり大学に入学し、家族滞在となる。

2003年就職、出産後2児の母となる（国立医療センターと社会保険中央病院で出産、入院助産の費用が出たうえに30万円の出産手当もあった）。

いくつかの仕事を体験した。不慣れな日本語で敬語の使い方を間違えたことを理由に解雇されたこともある。2009年12月に、職安通りに化粧品を中心とする韓国物産の小売店を起業することになった。保証金、家賃を払いながら、インタビュー時で4ヶ月になる。顧客は40代～50代の韓流ブームに乗った日本人女性が大半を占める。夜は観光バスでやってくる。ビジネスの展開、勝負どころはまさにこれからといったところ。Tさんは、接客業に向いていたコミュニケーション力のある性格で、ファンミーティングを企画するなど希望に満ちていた。

### ◇ 異国での出産

Tさんは日本で二度の出産を経験する。一番目の子のときは、まだ、日本語がうまく話せず、病院での検査の度に夫と一緒にいたりした。しかし、実際の分娩の時は、立ち会いができないと言われ、不安な気持ちのまま、一人で分娩室で頑張ったという。

分娩がうまく進まず、24時間以上たった頃には、主人がお医者さんに何回も帝王切開をお願いしたそうだが、自然分娩を勧められ、出産の違いも感じたという。後から考えると手術せず良かったという。

産後の手伝いのため、義理の母が来日してくれたが、家から病院に来る間、電車を間違っ、迷子になり、夫が迎えに行ったというエピソードも話してくれた。

異国での出産は不安であったが、区から出産助成金をもらい、少なくとも経済的不安から開放されていたこと、同胞同士の助け合いもあったことなどが家族の結びつきを強めてきた。ちなみに当時の母子手帳はまだ日本語だけであった。

#### ◇ 子どもの保育と教育について ー励みと悩みー

Tさんには小学校5年生と1年生の娘さんがいる。この子どもたちの誕生から子育て、現在までの悲喜こもごもの体験が、Tさん夫婦の絆を強めているとあっていいだろう。他にも保育や子育ての話など、移住する家族の実態を語ってくれた。経済的に苦しいときに、子どもたちのお稽古事をすべて止めたこともあった。日本語習得の進む子どもたちの成長は、夫婦の前向きな姿勢を勇気づけている。特に商売に挑戦するエネルギーは、子育てで自信をつけてきた過程と無関係ではない。

日本の公立保育園での経験が良く、日本の小学校に入れる際の迷いは無かったという。学校から持ってくる溢れるほどのチラシは理解できず、ほぼ捨てているが、準備するものに関して、保育園での遠足の際のお弁当が用意できなかった経験があり、それ以後は、子どもがしっかりと教えてくれるようになって助かるという。

Tさんは、韓国の知識中心の小学校教育とは違って、体育を始め、多方面でも体験をさせてくれる日本の教育方針に満足しているという。

しかし、Tさんの悩みのひとつは、子どもたちに韓国語を学ばせたいと思っていることだ。現在、こどもたちは日本語を日常的に使用しているが、将来を考えると母語であるハングルを修得させておきたい。そこで、家では、ハングルの絵本を読ませたり、書き写したり、韓国語で返事をしてくれたら、小遣いをあげるなど、色々と工夫している。

#### ◇ 将来の展望

Tさんの話を聞くと、日本での子育てを通した様々な経験が、人とのつながりを生み、人との付き合いの中での円満さを高め、さらにはご主人が始めた商売をしっかりとサポートできる源になっているように思える。そして、苦勞してきた経験を通して学んだ、韓国の魅力（コスメティック、インテリア商品など）を営業に活かすというマーケティングを展開しようとしている。顧客としては国籍を問わず、「女性」をターゲットとしているようだ。

今後、子どもたちの成長に伴って、ますます日本社会に根付いたビジネスで成功できる可能性は大きい。地域には、韓流ブームに乗って、遠隔地からも顧客が訪れてくる。新しい日韓の関係性や家族の生活の向上は、Tさんに市民としての意識をも培っているように感じられた。

## Ann さん (40 代・女性)

### 「日本語さえできればたくさんの機会がある国、日本」

2010 年 4 月 18 日、全羅北道出身、自営業、日本歴 6 年

インタビュアー：李 埈鉉（インタビューは韓国語で行われた）

#### ◇ 略歴と来日のきっかけ

2005 年来日の 42 歳の女性。夫と新宿でお店を経営。小 1 と 3 才の娘と百人町に住む。韓国ではソウルで大学卒業後、看護師として 1 年働き、教会の知り合いである夫と結婚。

日本に来るきっかけは、百人町でお店を経営する親戚から、店の従業員として来ないかという誘いを受け、それを頼りに何の準備（日本語の勉強、待遇の内容、住まいなど）もなく、ご主人と 1 才の娘を連れて来日した。しかし、実際に到着した百人町にあるお店は、経営破たん間近で、借金取りも来るし、給料もなく、住む部屋を探す余裕さえない状況で、初めての日本は、「ものすごく悲しかった」と当時の思いを語る。

来日前の Ann さんは大学卒業以来、看護師として働いていた。自ら経済力を持って社会生活をしていたので、心の余裕もあった。クリスチャンであるため宣教地としてカナダ、パキスタン、中国、シンガポールなどにも訪問し、将来も宣教のために活動する計画をたてていた。

#### ◇ 日本で自分のお店を持つまで

3 年計画での来日の決心から、新宿についたが、予想と違い、全ての生活は一変してしまった。はじめの 2 年間は給料なし。お店の奥にある部屋で子育てをしながら、夫婦で死に物狂いで働き、4 年後にそのお店を買い取ることができた。

日本での一番の苦勞は、住居環境も問題だ。給料をろくにももらえず、部屋を借りるお金も無かった。子どもを保育園にも預けられず、私立保育園は環境が劣悪で、お店で面倒を見ながら商売を続けたことが一番大変だったという。来日 4 年後に二番目の子どもを産んだ時も、ろくに産後休みも取れず電話注文などを受けざるを得ないほど、生活は休む暇もない毎日だった。

今は、自分名義のお店を持つことにも成功した。当時を思い出しながら、ここまでできた力の原点は、信仰心と独立心旺盛な性格だという。この性格は、幼い頃から親からあまり干渉されず自由に育ててもらったおかげだと付け加えてくれた。

#### ◇ 言葉の問題（日本語）

日本語に関しては、夫婦ともに急に来日を決心したので日本語は全く話せなかった。来日してから、ご主人はお店を手伝いながら日本語学校に通ったが、Annさんは全く日本語を習う機会も無く、ほぼ6年が過ぎってしまった。日本語が話せないことで、当初の取引先は「日本人の店」と「韓国人の店」が50:50だったが、今では30:70となり、多くの日本人経営のお店との取引ができなくなってしまった。最初に覚えた日本語が、

「いま、たんとうしゃがないので」「いま、がいしゅつちゅうです」

これだけを言い続けてお店を引っ張ってきたという。ひらがな、カタカナは、時間がある度に書いていると自然に覚えたが、テレビの音などは人より遅く、来日5年目になって、やっと聞き取れるようになったという。6年目を迎える今、お店での電話対応は、

「ツタツタだけど、言いたいことはほとんどいえるようになりました」

「今の我が店の取引先は全部私のお客さんですから」

という。自ら自分のお店の経営を仕切っている自負心も伺うことができた。3才から日本の保育園に通い小学校に上がった娘が何よりの日本語の先生で、「オンマ、それはこういうんだよ」と、優しく、ママの日本語を直してくれたり、学校でもらってくるフリガナのついたチラシを読むのが楽しみだという。今は、テレビも大事な先生。

#### ◇ 子どもの教育

子どもの教育に関しては、正直、忙しさのあまり、今まではあまり考えたことが無かったという。しかし、上の子が小学校に入ることをきっかけに、入学前に韓国にいる教育相談員をしている親戚に相談した。そこで、「せっかく日本にいたので、それを活かした方が良い」とアドバイスをもらい、日本の公立小学校に入れた。日本語と日本の価値観を学び、日本人と情緒的な交流ができることを期待している。

もう一つ、日本で子どもを教育する理由として、「日本という国は、閉鎖的な面もあるが、意外と日本語ができるという前提の下、たくさんの機会を与えてくれる国である」ことをあげた。「日本はたくさんの機会を得ることができる国である」というイメージはやはり成功した本人の経験の影響だろうか。

#### ◇ 将来の計画

「夫婦で同じ店の中で苦しみを乗り越え、喧嘩も絶えなかったが、絆も深まった。一人で日本にきていたら、とっくに帰ったはずだ」と振り返る。

これからの目標は、今のお店を大きくして、娘に譲ってあげることだ。不景気の現在は今の店を良く守りながらも、第二第三の我が店をもちたいという計画もある。儲けたお金の投資や、引退後の計画なども夫婦でよく話し合っているという。

Annさんは児童福祉に関心が高く、看護師の資格を無駄にせず、いつかは、そういう面で使えるようになることも期待している。「きっと、今まで守ってくれた神様がその願いもいつかはかなえてくれることを信じている」と話を終えた。



## <プロジェクトのキーワード> ナラティブ理論

河合優子

人が存在するところにはナラティブ（物語）がある、と言っても過言ではありません。フランスの思想家ロラン・バルトは、ナラティブは「どの時代にも、どこでも、そしてどんな社会にも存在」し、「人類の歴史の始まりと同時に存在していた」と主張しています（Barthes, 1975, P. 237）。コミュニケーション学者のフィッシャーは、人間を「物語る動物（Homo-Narrans）」と定義し、人はナラティブを通して現実世界を理解すると述べています（Fisher, 1984）。

人は、子どもの頃には、童話やアニメとともに成長し、大人になってからも小説、映画、ドラマといったナラティブとともに生きていきます。さらに、職場で同僚と口論になった経緯を家族に詳しく語るとき、落ち込んでいる友人からそのいきさつを聞くときの「経緯」や「いきさつ」もナラティブとして語られます。このように、自分が生きる世界だけでなく、異なる世界で生きる人びとのことも、ナラティブを通して触れることができます。ナラティブは、多様な文化、年齢、教育背景の人びとにとって、身近で理解しやすいものであると言えます。

ナラティブは、人文・社会科学において、特に 1980 年代以降、注目されるようになり、幅広い学問領域で理論的概念および分析方法として使われてきました（Riessman, 2008）。したがって、ナラティブの定義には様々なものがあります。しかし、広く定義すれば、2 つ以上の出来事が、関連した、連続性のあることとして語られること、と言えるのではないのでしょうか。

しかし、常に出来事 A と出来事 B が連続して語られるわけではなく、出来事 A と B の間に C を入れて語られることで違う印象を与える話になったりします。例えば、「韓国の大学で経済学を専攻し、日本経済について学んだ」「日本に留学した」という 2 つの出来事があったとします。この 2 つの出来事だけが語られたのであれば、「日本経済を学んだから日本に留学した」となります。しかし、「日本の大学院から奨学金をもらった」、さらに「アメリカの大学院へ行くことも考えていた」という出来事が、この間に語られると、

少し違ったナラティブになります。

では何のために人は「物語る」のでしょうか。主要な目的の一つが、過去の経験の記憶です。経験が存在するというよりは、「物語る」という行為によって経験はつくられるのです（野家、2005）。人生においてはさまざまな出来事が起こりますが、そのままでは、割れたガラスの破片のように無形であり、混沌としています。人はそのようなさまざまな出来事をつなぎあわせることで経験（＝ナラティブ）として記憶します。しかし、すべての出来事が経験を構成するわけではありません。ある出来事は別の出来事とつなげられることなく、人生の経験の一部とならず忘却される、もしくは語られないことがあります。ある人の人生において、関連性のあるものとして語られた過去の出来事の集合体、つまり、ナラティブ（＝経験）は、同時に、その人が誰であるかという意味、つまりアイデンティティを表すものでもあります。

ニューカマー韓国人のライフ・ヒストリーというナラティブから、語り手の生きる世界やアイデンティティを垣間見ることになります。さらに、このプロジェクトでは、多様な世代の日韓の研究者がインタビューにあたりました。よって、ここで語られた人生は、ニューカマー韓国人の人たちと研究者の共同作業によるナラティブであり、語り手の人生の一面に過ぎないのかもしれないかもしれません。それでもこれを読んだ方には、新宿のニューカマー韓国人の「顔」が、以前より少しははっきりと見えてくるのではないのでしょうか。

#### 引用文献

- Barthes, R. (1975). An introduction to the structural analysis of narrative. *New Literary History*, 6(2), 237-272.
- Fisher, W. R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs*, 51, 1-22.
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波現代文庫

## 〈프로젝트의 키워드〉 내러티브 이론

인간이 존재하는 곳에는 내러티브(이야기)가 존재한다라고 말해도 과언이 아닙니다. 프랑스의 사상가 로렌발트는 내러티브가 “어떠한 시대, 장소, 그리고 사회에도 존재하며 인류 역사의 시작과 동시에 존재하고 있었다” 라고 주장합니다(BArtHes, 1975, P. 237) . 커뮤니케이션 학자인 피셔는 인간을 “이야기하는 동물 (Homo-Narrans)”이라고 정의함으로써 사람은 내러티브를 통해 현실세계를 이해한다고 언급했습니다 (Fisher, 1984) .

인간은 어릴 적에는 동화나 애니메이션을 접하며 성장하고 어른이 되어서는 소설, 영화, 드라마와 같은 내러티브 속에서 살아가고 있습니다. 또한 직장에서 동료와 다룬 경위를 가족에게 자세히 이야기 하는 경우나 풀이 죽어있는 친구에게 그 이유를 물을 때, 우리는 “경위” 또는 “경과” 를 내러티브로서 듣게 됩니다. 이처럼 내러티브를 통하여 자기가 살아가는 세계뿐만 아니라 전혀 다른 세계에서 살아가는 사람들을 접할 수 있습니다. 내러티브는 다양한 문화, 세대, 교육 배경을 가진 사람들에게 있어서 친밀하고 이해하기 쉬운 것이라고 말할 수 있습니다.

내러티브는 특히 1980 년대 이후 인문, 사회과학 분야에서 주목 받기 시작하여 폭넓은 학문 영역에서 이론적인 개념 또는 분석방법으로 사용되어 왔습니다 (Riessman, 2008) . 때문에 내러티브에 대하여 다양한 정의가 존재하지만 넓은 의미에서 정의하자면 연속성과 관련성을 가진 두 개 이상의 사건을 이야기하는 것이라고 할 수 있겠습니다.

하지만 사건 A 와 사건 B 를 항상 연속적으로 이야기하는 것이 아니라 사건A와 사건B사이에 C를 넣어 이야기함으로써 전혀 다른 인상을 가진 이야기가 되기도 합니다. 예를 들면 “한국의 대학에서 경제학을 전공하고 일본경제에 대해서 배웠다”, “일본에 유학왔다” 라는 두 개의 사건이 있다고 가정합시다. 만약 이 두 개의 사건만을 본다면 “일본경제에 대해서 공부했기 때문에 일본에 유학왔다” 라는 이야기가 구성됩니다. 하지만 “일본의 대학원에서 장학금을 받았다”, “미국의 대학원에 가는 것에 대해서도 생각했었다” 라는 사건이 그 중간에

이야기되어지면 조금 틀린 내러티브로 변하게 됩니다.

그러면 인간은 왜 이야기를 할까요? 주된 목적 중에 하나는 과거 경험의 기억입니다. 경험이 존재하기 보다는 “이야기를 하는 행위”를 통해 경험이 만들어져 가는 것입니다 (野家、2005) . 사람의 인생중에는 여러가지 사건들이 일어나지만 그것들은 깨어진 유리의 파편처럼 무형의 혼돈으로 존재합니다. 인간은 그와 같은 여러가지 사건들을 끼워 맞추므로써 경험(내러티브)으로 기억하게 됩니다. 하지만 모든 사건들이 경험을 구성하지는 않습니다. 어떤 사건은 또 다른 사건과 관련되지 않고 인생 경험의 한 일부로서 잊혀져 가거나 이야기 되어지지 않는 경우도 있습니다. 어떤 사람의 인생에 있어서 관련성 있는 것으로 이야기되어진 과거 사건의 집합체 즉 내러티브(경험)는 그 사람이 어떤 사람인가 라는 의미와 동시에, 말하자면 그 사람의 아이덴티티를 나타내기는 것이기도 합니다.

새로이 이주해 오신 한국분들의 라이프스토리라는 내러티브로 부터, 이야기하는 사람의 살아가는 세계나 그 사람의 아이덴티티를 엿보게 됩니다. 더 나아가 이번 프로젝트는 여러 세대의 한일 연구자들이 인터뷰에 참여하였습니다. 때문에 지금 이야기되어지는 인생은 새로이 이주해 오신 한국분들과 한일 연구자들의 공동작업으로 만들어진 내러티브이며 이야기하는 사람의 인생의 한 부분일지도 모릅니다. 그렇지만 이것을 읽은 분들은 신쥬쿠에 이주해 오신 한국분들의 “얼굴”이 전보다 조금은 확실히 보이지 않을까요?

## 인용문헌

- Barthes, R. (1975). An introduction to the structural analysis of narrative. *New Literary History*, 6(2), 237-272.
- Fisher, W. R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs*, 51, 1-22.
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 野家啓一 (2005) 『物語の哲学』 岩波現代文庫

## スケジュール／스케줄

### 2009年

- 11月 準備
- 12月 パイロット調査

### 2010年

- 1月 インタビュー開始
- 4月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 8月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 9月 中間報告会・中間報告書発行

### 2011年

- 3月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 7月 成果公開 (ホームページ、印刷物など)
- 10月 最終報告会・最終報告書発行

### 2009년

- 11월 준비
- 12월 예비조사

### 2010년

- 1월 인터뷰 개시
- 4월 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
- 8월 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
- 9월 중간보고회, 중간보고서 발행

### 2011년

- 3월 성과 공개 (홈페이지, 인쇄물등)
- 7월 성과 보고 (홈페이지, 인쇄물등)
- 10월 최종보고회, 최종보고서 발행

## プロジェクトメンバー／프로젝트 멤버

渡辺 幸倫 (わたなべ・ゆきのり／와타나베 유キノ리) 相模女子大学学芸学部講師／社会教育、言語教育

若園 雄志郎(わかぞの・ゆうしろ／와카조노 유시로) 国土館大学 21 世紀アジア学部非常勤講師／多文化教育、少数民族の教育

川村 千鶴子 (かわむら・ちづこ／카와무라 치즈코) 大東文化大学環境創造学部教授／移民政策、多文化社会論

宣 元錫 (そん・うおんそく／선원석) 中央大学総合政策学部兼任講師  
／社会政策、労働問題、移民政策

藤田ラウンド 幸世(ふじたらうんど・さちよ／후지타라운드 사치요)桜美林大学基盤教育院非常勤講師／社会言語学、バイリンガル教育

河合 優子 (かわい・ゆうこ／카와이 유코) 東海大学文学部准教授  
／異文化コミュニケーション、メディア論

李 坪鉉 (い・ほひょん／이호현) 早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師、和洋女子大学人文学部非常勤講師／社会教育、文化間移動者の文化変容

武田 里子 (たけだ・さところ／타케다 사토코) 明星大学非常勤講師・放送大学東京文京学習センター非常勤講師／地域社会学、多文化社会論

堀内 康史 (ほりうち・やすし／호리우치 야스시) 大東文化大学環境創造学部非常勤講師／社会学

呉 世蓮 (お・せよん／오세연) 早稲田大学大学院教育学研究科  
／生涯教育、多文化教育の日韓比較

この研究に関するお問い合わせは：

연구에 관한 문의는：

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1

相模女子大学 10 号館 406 研究室 渡辺幸倫

<http://koreannewcomersintokyo.web.officelive.com/default.aspx>

『新宿のニューカマー韓国人のライフストーリー記録集 1 』

2010年5月10日

編集・発行：新宿のニューカマー韓国人のライフストーリー記録  
集作成プロジェクトチーム

印刷：チヨダクレス株式会社